17『カタ・ウパニシャッド』「死神の秘教」の教えと世阿弥の稽古論 ～伝統芸能修行法の日印比較研究の試み

【全６回】／開催方法：対面のみ

瀬古康雄（せこやすお）

シタール奏者
しまねガムラン主宰

受講料	一般料金：￥10,600	早割価格：￥9,600（納入期限：5月7日）

［日程］【全６回】１回／月　第２土曜日
（5/9、6/13、7/11、9/12、10/10、11/14）
［時間］14：10～15：40

■受講に必要なもの
［テキスト］レジュメ配布

古代インドの初期ウパニシャッドには「梵我一如」というインドの宗教思想の根幹が説かれているが、この教えは人々にとっては実に神秘的なトランスの悟りであった。ところが、BC５～４C.になるとブッダ（釈尊）の中道・禅定やマハーヴィーラ（ジャイナ教の開祖）の苦行などシュラマナ（沙門）の様々な修行法が現れ、超人的なトランスの悟りから万人のための「修行の道」へという大きな変化が生まれた。そして、仏教興隆後の中期ウパニシャッドである『カタ・ウパニシャッド』の「死神の秘教」（BC350～300）には、後のヴェーダーンタ哲学やヒンドゥー教の基礎となる修行論が最も簡潔に記されるようになる。「死神の秘教」は死者の国へと赴いたナチケータスという名の若者が、死神Yamaから生と死についての秘教を授けられる物語で、仏教やヨーガの修行法を取り入れて師資相承の修行の奥義を説いたものである。

叡智ある者は、①ことばと②思考力とを抑制すべきである。それを③知識としてのアートマンのなかに抑制すべきである。知識を④大きいものとしてのアートマンのなかに抑制すべきであり、それを⑤平安なアートマンのなかに抑制すべきである。『カタ・ウパニシャッド』（3-13）

不思議なことに上記の５段階の修行は世阿弥が『風姿花伝』や『花境』で説いている五智（舞の稽古の手順）と非常によく似ている。おそらく世阿弥が仏教の教えを取り入れたためであろうが、表演芸術の修行法が確立された時代のものとして日印共通の段階的な表現になっているものと思われる。

「無心の位にて、我が心をわれにも隠す案心にて、せぬ隙の前後をつなぐべし。これすなはち、万能を一心にてつなぐ感力なり。」

① 手智（手足を動かす基本）
② 舞智（立ち姿の型を究める）
③ 相曲智（音曲の懸かりで舞う）
④ 手体風智（一曲中に風情を込める有文風）
⑤ 舞体風智（無心の心で舞う無文風、無姿）
『花鏡』　舞声為根

この講座では上記のような伝統芸能修行法の日印の比較研究が主題であるが、私自身は長年、シタール の練習と演奏を手掛けているので、シタールの演奏を通して五つのステップを体験的に表現し、それぞれのステップでの演奏テクニックと音色の変化を確認したい。

また、かつては能舞台を何年もの間にわたってみてきたので、能の稽古や舞台のビデオを紹介しながら世阿弥の五智（舞の稽古の手順）についても、五つのステップを取り上げ、出来ればバラタナティヤムなどのインド古典舞踊の基本的な所作と比較し、両者の同一性と差異を明らかにしてみたいと思う 。